

仕事と主体的に向き合う



仕事がつまらない



私たちにとって、「仕事」とは生活の糧を得ることであり、自分の可能性を発揮する場でもあり、社会貢献ができる機会でもあるはずです。しかし、私たちは、そのように仕事に向き合っているでしょうか。今月は、私たちの人生における仕事の持つ意味について考えます。

「おれ、会社辞めようと思っているんだ」

坂口良太君（23歳）はコーヒーをすすりながら、そうつぶやきました。ここは、高校時代の同級生・吉崎賢治君の家。六月の日曜の昼下がり、二人は高校のときのように柱に背をもたれかけ、けだるそうに時を過ごしていました。

「ばか言うなよ。せつかく大学を出て、





おれは会社
辞めようかと
悩んでいるんだ

……希望どおりの
出版社に入れた
んじゃないかい

希望どおりに出版社に入れたんじゃないか。まだ一年しかたつてないのに……」

「でも、つまらないんだ。企画会議でも、おれの企画なんか、まだ一つも通つたことがないし、毎日使いつ走りみたいなのとばかりだからな」

「ぜいたく言っているよ。高給取りのくせに。おれたちフリーターには、失業保険も年金も、何もないんだぜ」

賢治君は、高校時代に組んだロックバンドの活動を続けるために就職しませんでした。そして、コンビニなどを転々としてアルバイトをしているのです。

「でも、賢治は自由に見えるよ」

良太君の言葉に、賢治君が答えました。

「模造品の自由さ。親が許してくれている間だけの自由だよ。最近、親がどこか

に勤めろつて、うるさくてしようがない

んだ。追い出されたらホームレスになる

しかないし、おれの境遇で就職口なんて

あるわけがないよ。自由なんて幻想さ」

賢治君は、いまはプロのミュージシャ

ンとして自立できるとは思っています。

だから、いい就職先があればほんとうは

働きたいのですが、それが見つからなく

てフリーターを続けているのです。

良太君にも、賢治君が真の自由を手

しているとはとても思えません。むしろ、

ほんとうに深刻なのは賢治君のほうなの

だとも思いました。なぜなら、自分は曲

がりなりに正社員として就職していま

すが、賢治君は正規の職を得ることがで

きなくて焦っているからです。

夢と現実

フリーターとは「フリーアルバイター」

の略語です。一九八〇年代後半のバブル

期、就職戦線は売り手市場でした。しか

も、終身雇用制がぐらついてきた時代で

もあり、若者は「自分探し」を優先して

学校を卒業しても正社員にならず、アル

バイトやパートとして働く傾向が増加し

ました。また、正規に就職した人でも、

自分に合っていないと思えば、すぐに会

社を辞めるという傾向も顕著でした。だ

から、フリーターというたと自発的に会社

などの組織に身を置かない人、というイ

メージが定着したのかもしれませんが。

しかし、事態は一九九〇年代後半から大きく変化します。バブルが崩壊し、深刻な不況がやってきてリストラが断行されるのです。企業は人員削減を進め、就職が氷河期に入るとともに雇用形態も大きく変わります。各社は正社員を減らし、パートやアルバイトで労働力を補充するようになっていったのです。自発的な離職者どころか、不用になったら切り捨てやすいし、定期昇給のような保証もないフリーターは、不況の企業を支える便利で貴重な戦力となっていきました。

フリーターは、いまや「ニート」(Not in Employment, Education or Training の頭文字)仕事もせず、進学もせず、職業訓練も受けていない人たちのこと)と



ともに、わが国の大きな社会問題となつていきます。

賢治君も、高校を卒業するときは、正規な就職をするよりもロックバンドを通じての目標の実現に価値を置いていました。だから、フリーターの道を選んでプロのミュージシャンをめざしたのですが、途中から事態は変わりました。自分にプロになる実力がないと分かり、いざ就職を考えたときには、就職の門戸が閉ざされていたのです。

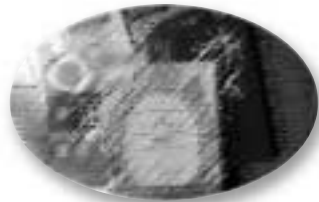
賢治君の問題は、良太君にとっても他人事ではありません。良太君から見れば、賢治君は現実と妥協せず、夢を追い求める勇気ある理想の親友でした。ところが、その賢治君が、いま夢と現実の両方につまずいているのです。

良太君もまた、夢に燃えて入社した出版社で、現実とぶつかってつづれそうになつていきます。自分よりも行き詰まった状況にある賢治君の問題を解決することは、自分の問題解決に必要な唯一の方法のような気がします。

そうは思いながらも、良太君は仕事にやる気が起きない自分をどうすればいいのかわからず、ため息をつきながら賢治君の家をあとにしました。



今井さんの 倉庫改革



良太君は、去年の四月にS出版社に入

社しました。しかも、大学時代からあこがれていた編集部はいぞくに配属されて、とても張り切っていました。有名な著者ちよしやの家を訪ねて親しく話をしたり、原稿を読んで感想や意見を述べたりし合いながら自分を高められると思っただけです。そして、すばらしい作品を編集して、世に出すこ

とを夢に描えがいていました。

ところが、現実とは違いました。仕事は先輩せんぱいから言われた資料集めやコピー取り、事務作業などで、夏以降は校正こうせいを教えてもらってやるようになりましたが、先輩からは間違いばかり指摘されます。良太君は、まるで先輩が意地悪いじめしているように感じてしまいました。そのころから、だんだん意欲いよくが減退げんたいし、仕事がおもしろくなくなってきたのです。

月一回の編集会議でも、企画書を提出しなければならぬというプレッシャーから義務感ぎむかんに縛しばられ、良太君は類似の書籍しよきを参考に適当な企画書を出すなどして、上司のひんしゆくを買ったりしました。それですますます自信をなくし、仕事がかたく肩にのしかかってくるように感じ



るのでした。

いつ辞めようかと思っていた矢先の七月下旬、S出版社に途中入社で今井浩二さん（30歳）という人が入ってきました。一流企業のN電機から転職してきたこの今井さんが、やがて良太君にとつて、とても気になる存在になっていきます。

今井さんは編集の仕事がしたくて転職してきたのに、社内にある倉庫の管理を命じられました。在庫のほとんどは倉庫会社に預けてあるのですが、一部だけ本社の倉庫に保存してあり、その在庫管理の仕事を指示されたのです。

不本意な仕事をやらされることになったのですから、良太君は今井さんがいつか辞めるだろうと思っていました。

ところが、今井さんは意外な行動に出

ました。雑然ざつぜんとしていた倉庫内の書籍を種類ごとに片づけ直し、それぞれの商品のところに棚札たなふだというものをぶら下げたのです。それには在庫数が記され、だれかがそこから商品を持ち出す場合は、名前と日時と数を記入するようにしました。今までは棚卸たなおろしするとき以外は、だれも在

庫数などを把握はさぐしている人はいなかったのですが、棚札がつるされてからは、何月何日現在の在庫がだれにでも分かるようになり、倉庫も整理整頓せいりせいとんされるようになりました。社内には原価意識げんかいしきが育っていき、徐々に利益につながっていったのです。

会社と自分

十月、今井さんは編集部に異動しました。良太君は当然の人事だと思いました。その数日後、良太君が残業ざんぎょうしていたとき、S出版社の書籍パンフレットを編集制作する広報係こうほうがいの明かりの下に今井さんの姿が見えます。それとなく様子をうか

がっていると、今井さんは編集の仕方を一つひとつ担当者に聞きながら、パンフレット作成を手伝っているのです。明らかに自分の仕事の残業ではなく、編集技術ぎじゆつを身につけるために率先して広報係の手伝いをしていくことが分かりました。ある日、良太君は今井さんを昼食に誘いました。そして聞きました。



「今井さんは、どうして一流企業を辞めてこんな零細出版社にまたたんですか。収入もだいぶ減ったでしょう」

「ええ。でも、満足なんですよ」

「なぜなんですか。どうしてそんなに仕事に打ち込めるんですか。正直言って、ぼくは仕事がつまらなくて、会社を辞めようと思っているんですよ」

「……私は、ほんとうは表現にかかわる仕事に就きたかったのに、大学卒業時に不安を感じ、怖くなつて条件のいい大企業を選んでしまったのです。でも、その後、いつも自分で自分をごまかして生きているという思いをぬぐい切れませんでした。そして、会社という巨大な組織の一部となり、ただ一日一日を通り過ぎてきたのです。結果、その自己嫌悪から」

抜け出すためには、一度、自分が心から望んでいる仕事に就いてやり直さなければだめだと思ったのです」

今井さんは、仕事を自分の生き方の一環として受け取り、会社をみずからの可能性を發揮する場としなければならぬと思ったといいます。むしろ、会社もそういう人材を求めていると思う、ともつけ加えました。倉庫の仕事だって、これも自分が望んだ仕事の通過点だと思えば、自分なりの創意工夫がわいてくるし、実現したときは喜びに変わったといえます。今は編集技術を身につけることに夢中だと、目を輝かせるのでした。

良太君は、強い衝撃を受けました。人生の大半の時間を過ごす仕事の心構えが、人生も左右すると思えたのです。

主体的に 仕事をとらえる



それからの良太君は、さまざまな本を読みあさり、仕事について、また自分自身の生き方についても考えるようになりました。ある本では、「仕事の中に仕事がある」という言葉と出会いました。職場や業種、上司など、外面に仕事の喜びを求めても与えられるものではない。どんな仕事でも、仕事自体に身を入れればそ

ここに新たな世界が展開し、創意工夫の仕方が見えてきてやりがいも生じる、という意味だろうと良太君は理解しました。

「現実には、ぼくたちが希望する職業に就くことは容易ではなくなってきた。理不尽な条件を要求されることも珍しくない。だからといって、社会が悪い、時代が悪いとぼやいていてもしかたがない。問題の半分は、ぼくたち個人の生き方にもあるのではないか」

良太君はそんなふうにも考えました。

やがて百歳を迎える臨済宗妙心寺派の禅僧・松原泰道師の次のような言葉に接しました。

※

臨済という中国のお坊さんが、「随处ニ主ト作レバ立処ミナ真ナリ」という言葉



を残しています。

「随処」とはどこでもということ、「主」は主体性、やる気になることです。どんなところでもやる気になって取り組めば、「立処」、つまりあなたの立っているところに真理が微笑むという教えです。

岡山のノートルダム清心学園理事長の渡辺和子先生がまだ学生するとき、アメリカのミッションスクールに留学されました。

あるとき、寄宿生活でお皿を拭いてパンを配る当番になったそうです。渡辺さんは日本からの留学生というプライドがあったのですね。お皿を拭いてパンを配るなんて、こんなことは下級生にやらせればいいことだと思いつながら仕事をされていた。

するとシスターが、「渡辺さん、今何を考えて仕事をしていますか」と聞いた。

渡辺さんは本心が言えないので、「いえ、何も考えていません」と答えると、シスターは、「何も考えていないと雑念が入ります。あなたは雑用だと思っっているけど、お皿を拭くのも、パンを配るのも神の御心をお伝えする行いだと考えれば雑用ではなくなります」と、渡辺さんを諭されたのです。

これが「随処ニ主トナレバ立処ミナ真ナリ」ということでしよう。

(モラロジー研究所刊『れいろう』二〇〇二年七月号)

※

松原泰道師の言葉が心にしみました。

“ぼくらが仕事に向き合うとき、現実

を生きるとき、自分が随処に主とならなければ、生きがいや仕事のやりがいなんか生まれるはずはない”

良太君は、どんな小さな仕事でもそれを主体的な自分の生き方として、とらえ



ていくことの大切さを強く感じたのでした。同時に、賢治君のことも考えました。

賢治は就職したくても正規雇用の壁には生まれ、フリーターを余儀なくされている。その点、ぼくはS出版社という活動の場を持つているのに、不満を会社のせいにし、被害者意識に陥おちいっていただけなんだ。賢治の力になりたいのなら、編集者という仕事を通して社会を少しでも良くしていくこともできるのに……。これからは、今井さんのように主体性をもつて仕事に取り組んでいこう”

そう思うと、勇気がわいてきました。仕事を通して、自分の力を発揮していく意味と、他人や社会に役立つことで得られる喜びをともに味わうことができるように感じました。

みずからがなる「道しるべ」

そんなある日、また今井さんが遅くまで残業していることに気づきました。良太君が何をしているのかと尋ねると、今井さんは笑って答えました。

「私が年長の新入社員ということもあるんでしようが、社員同士のコミュニケーションがもつと必要だと思います。だから、手作りの『道しるべ』という社内誌を作り、みんなが考えていることを発言する場にしたと思うんです」

今井さんは、今回も残業ではなく、自発的に居残って社内誌作りに取り組んでいたのです。良太君も、この日から社内誌作りの手伝いをすることにしました。

そして、今井さんといっしょに、楽しくてやりがいのある職場を作っていこうと決心したのでした。

良太君は、これから四月の新年度に向けて、公私の場では会う人々に頼んで、賢治君の就職口を探してみようと思いましたが、賢治君にも主体性を発揮する場を持つてもらい、生きる意味や働く喜びなどを共有してほしいと思ったのです。

